

日本国民文学全集
2

万
葉
集

土屋文明訳

河出書房版

日本文学全集 第二卷 万葉集

昭和三十一年五月二十五日初版印刷
昭和三十一年五月三十一日初版発行

定価三四〇円

訳者 上屋文明

発行者

河出孝雄

印刷者

川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八

発行所 株式会社 河出書房

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話二九三七二一
振替東京一〇八〇二番

図書印刷株式会社印刷・小滝製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

万葉集

本文

三

総目次

三

解説

七

装幀 原 弘

万
葉
集

土
屋
文
明
訳

万葉集 卷第一

雑歌

泊瀬朝倉宮で天下を治められた天皇の御代 大泊瀬稚武天皇

皇(雄略天皇)

天皇の作られた歌

1 籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この丘に 菜摘ます子
家告らせ 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて 我こそ居れ
しきなべて 我こそませ 我こそは 背とは告らめ 家をも名をも

(籠をよ、籠を持って、掘串をよ、掘串を持ってこの丘に若菜を取っているおとめ、あなたの家を言い、名を言いなさい。ソラミツ大和の国はいちように私が治めている、全部を私が治めている。私こそは、あなたの夫として私の家も私の名も、知らせましようよ)

高市岡本宮で天下を治められた天皇の御代 息長足日広額天皇(舒明天皇)

天皇が香具山に登って国見をなされた時作られた歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし 国ぞ あきつ島 大和の国は

(大和には群がる山々があるけれど、形の整った天の香具山に、登り立って国を見渡せば、国の村々には煙が立ちに立つ。広い海には

かもめが立ちに立つ。よい国であるぞ、アキツシマ大和の国は。)

天皇(舒明)が宇智野で狩をなされた時、中皇命が間人連老を使として献上した歌

3 やすみしし 我が大君の 朝には 取りなでたまひ 夕べには い寄り立たしし みとらしの あづさの弓の 長はずの 音すなり 朝狩に 今立たすらし 夕狩に 今立たすらし みとらしの あづさの弓の 長はずの 音すなり

(ヤスミシン我が天皇の、朝は手に取ってなでられ、夕べはそばへ寄って見られた、御愛用のあづさの弓の、長はずという弓の音がします。朝の狩を今なさるのでしょう。夕の狩を今なさるのでしょう。御愛用のあづさの弓の長はずという弓の音がします。)

反歌

4 たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野
(タマキハル宇智の広い野に馬を並らべて朝の狩をされるのでしょう、その草の茂った野に。)

舒明天皇が讃岐国安益郡に行幸された時、軍王が山を見て作った歌

5 霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず 群肝の 心を 痛み ぬえ子鳥 うら嘆げ居れば 玉だすき 掛けのよろしく 遠つ神 我が大君の いでましの 山越しの風の 独居る 我が衣手に 朝夕に 返らひぬれば ますらを と 思へる我も 草枕 旅に しあれば 思ひやる たづきも知らに 多配の浦の 海人処女らが 焼く塩の 思ひぞ焼くる 我が下心

(霞の立つ長い春日の日が、暮れてしまったこともわからずに、ムラキモノ心が悲しく、ぬえ鳥の声のように嘆いていると、タマダスキ言葉に出すのも貴い、遠つ神の我が天皇の、行幸しておられる山を

越えてくる風が、妻を離れている私の衣の袖に、朝に晩に吹き返るものだから、強い男と思っていた自分も、クサマクラ旅中だものだから、心を慰めるやり方もなく、多配の浦のあまの女たちが、焼く塩のように思いこがれるよ、私の心の中が。)

反歌

6 山越しの風を時じみ寝る夜おちず家なる妹をかけてしぬびつ
(山を越して来る風が絶えないので、寝る晩ごとに、故郷の家にいる妻を思いしのんだ。)

右の歌は、『日本書紀』を見ると、舒明天皇の讃岐国に行幸されたことはない。また、軍王のこともよくわからない。ただ、山上憶良の『類聚歌林』に『日本書紀』に『舒明天皇が十一年己亥の冬十二月十四日、伊予の温泉の行宮に行幸された云々』とある」と言っている。ある書に「この時、行宮の前に二本の木があつて、それにイカルガとシメの二種類の鳥がひどく集つたので、詔を下して稲穂をたくさん掛けて食わせられた。その時作つた歌云々」とある。あるいは、その行幸のついでのことであるかもしれない。

明日香の川原宮で天下を治められた天皇の御代 天豊財重

日足姫天皇(斉明天皇)

額田王の歌(王のことはよくわからない)

7 秋の野のみ草刈りふき宿れりし宇治の都の飯庵し思ほゆ

(秋の野の草を刈りふいて宿つた宇治の都の飯の庵が思われる。)

右の歌は、山上憶良の『類聚歌林』を見ると、「ある書に『戊申の年(大化四年)比良の宮に行幸された時の御歌である』とある。ただし、『日本書紀』には「斉明天皇の五年春正月三日、天皇が紀伊の温泉からお歸りになられた。三月一日、天皇が吉野の離宮に行幸されて宴会を催された。三日、天皇が比良の浦に行幸

された。」とある。

後岡本宮で天下を治められた天皇の御代 (斉明天皇)

額田王の歌

8 熱田津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎ出でな
(熱田津に船乗りをしようという月を待つと、潮も都合よくなった。さあ、こぎ出そう。)

あ、こぎ出そう。)

右の歌は、山上憶良の『類聚歌林』を見ると、「飛鳥の岡本の宮で天下を治められた天皇(舒明)の元年己丑の年と、九年丁酉の年の十二月十四日とに、天皇・皇后お二方が伊予の湯の宮に行幸された。後の岡本の宮で天下を治められた天皇(斉明)の七年辛酉の年の春正月六日に、天皇の御船が西に行き初めて海路にお就きになり、十四日に伊予の熱田津の石瀨の行宮に御停泊なされた。天皇は、かつておいでになられた時の自然が今もなお残っているのを御覧になり、その時ひどく御感動になつて御歌を詠んで、悲しまれた。この歌はその時の天皇の作られたものである。そして額田王の歌は別に四首ある。」と言っている。

紀伊の温泉に行幸された時、額田王の作つた歌

9 勾の田伏見つつ行け我が背子がい立たしけむいかしが下
(勾の田の庵を見ながら行きなされよ、そこはわが夫がかつて立たれたカシの木の下でありますよ。)

中皇命が紀伊の温泉に行かれた時の御歌

10 君が代も我が代も知るや岩代の丘の草ねをいざ結びてな
(あなたの寿命も私の寿命も延べるこのできるこの岩代の丘の草を、さあ、結びましょう。)

11 我が背子は仮庵作らず草なくば小松が下の草を刈らさぬ
(わが君は、仮の庵を作られる草がないならば、あの小松の間の草を刈りなされよ。)

12 我が欲りし野鳥は見せつ底深き阿胡根の浦の玉ぞ拾はぬ(ある本の
初二句、「我が欲りし野鳥は見しを」)

(私の見たいと思つてゐた野鳥は見た。底の深い阿胡根の湾の玉はまた拾わない。)

右の歌は、山上憶良の「類聚歌林」を見ると、「天皇の御歌云々」とある。

中大兄(近江の宮で天下を治められた天皇(天智天皇))の三山の歌

13 香具山は 敵火を愛しと 耳成と 相争ひき 神代より かくなる
らし 古へも しかなれこそ 現身も 妻を 争ふらしき

(香具山は敵火山が可愛いというので、耳成山と争った。神代からこうしたものと見える。昔もそうであるから、現世でも妻を争うものと見える。)

反歌

14 香具山と耳成山と会ひし時立ちて見に来し印南国原
(香具山と耳成山と会戦した時、阿耆の大神が国を出て見に来たという印南国原であるよ。)

15 渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜明らけくこそ

(大海の美しい旗雲に入日がさしている今夜の月は、明るいことであらう。)

右の一首の歌は、今考えると反歌のようでない。ただ、古い本には、この歌を反歌として載せているので、今もそのまま、この順序に載せておく。

近江の天津の宮で天下を治められた天皇の御代 天命開
別天皇(天智天皇)

天皇が内大臣藤原朝臣(鎌足)に詔して、春山の多くの花と秋山の多くの紅葉といずれが美しいかを競わせた時、額田王が歌で判定された歌

16 冬こもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし

花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず
秋山の 木の葉を見ては 紅葉をば 取りてぞしぬふ 青きをば
おきてぞ嘆く そこし恨めし 秋山我は

(冬が終り、春になってくれば、今まで鳴かなかった鳥も鳴いたけれど、今まで咲かなかった花も咲いたけれど、山が茂っているのはいつでも取らない。草が茂っているので手にしても見ない。秋山の木の葉を見ると、紅葉したのをば手に取って愛玩し、青いのはそのまま置いて嘆息する。そこは恨めしいが、私は秋山のほうである。)

額田王が近江の国に下った時作った歌、井戸王の唱和の歌

17 うま酒 三輪の山 育によし 奈良の山の 山の際に い隠るまで

道のくま い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしば
も 見さけむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや

(ウマサケ三輪の山を、アラニヨシ奈良の山の山の辺りに隠れるまで、道の曲り目が多くなるまで、よくよく見ながら行くものを、幾度も幾度も遠く眺めようものを、無情にも雲が隠すべきではあるまい。)

反歌

18 三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなむ隠さふべしや

(三輪山をそんなに隠すのか。雲でも思いやりはあつてほしい。隠すべきではあるまいよ。)

右の二首の歌は、山上憶良の『類聚歌林』に「都を近江の国に遷された時、三輪山を御覧になられた天皇の御歌である」とある。

『日本書紀』に「天智天皇の六年丙寅の年の春三月十九日に遷都された」とある。

19 へそかたの林の先のさ野榛の衣につくす目につく我が背
(へそかたの林のあたりの榛の木が染料として着物につくように、目につく我が君であるよ。)

天皇が蒲生野で狩をされた時、額田王の作った歌

20 あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る
(アカネサス紫野を行き、標を立てた野を行き、野の番人は見はし

ないであらうか。君が袖を振るよ。)

皇太子の答えられた御歌「明日香の宮で天下を治められた天皇(天武天皇)」

21 紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも
(紫草の如くに美しい君を、憎くあるならば、人妻であるのだから、

私は恋はしないでしよう。)

『日本書紀』に「天智天皇の七年丁卯の年の夏五月五日、蒲生野で狩をされた。その時、大皇弟・諸王・内臣及び群臣がことごとく従った」とある。

明日香の清御原の宮の天皇の御代 天淳中原藏真人天皇(天

武天皇)

十市皇女が伊勢神宮に参詣された時、波多の横山を見て、吹黄刀目の作った歌

22 川上のゆつ岩群に草むさず常にもがもな常処女にて
(川のはとりの岩の群がりに、草が生えないように、常に変らずあ

りたものである。永久の処女として。)

吹黄刀目のこではよくわからない。ただし、『日本書紀』に「天武天皇の四年乙亥の年の春二月十三日に、十市皇女と阿閉皇女とが伊勢神宮に参詣された」とある。

麻績王が伊勢の国の伊良湖の島に流された時、ある人の悲しんで作った歌

23 うつそを麻績王海人なれや伊良湖が島の玉藻刈ります
(ウツソヲ麻績王は海人であるのだろうか。伊良湖の島の海草を刈

っておられる。)

麻績王がこれを聞いて悲しんで唱和された歌

24 現身の命を惜しみ波にぬれ伊良湖の島の玉藻刈り食す
(ウツセミノ命が惜しいので、波にぬれて伊良湖の島の海草を刈つ

て食うよ。)

右の歌は、『日本書紀』を考えると、「天武天皇の四年乙亥の年の夏四月十八日、三位麻績王が罪あつて因幡に流され、一人の子は伊豆の島に流され、一人の子は血鹿の島(五島列島)に流された」とある。ここに、伊勢の国の伊良湖の島に流されたところのは、あるいは、後世の人が歌の言葉によって誤り記したのであらうか。

天皇(天武)の作られた歌

25 み吉野の耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なくぞ 雨は

降りける その雪の 時なきが如 其の雨の 間なきが如 くまも

おちず 思ひつづぞ来る その山道を

(み吉野の耳我の嶺に時なしに雪は降っていた。間なしに雨は降っていた。その雪の時のない如く、その雨の間のない如く、曲り目曲

り目毎に、思い思つて来るよ、その山道を。

ある本の歌

26 み吉野の 耳我の山に 時じくぞ 雪は降るとふ 間なくぞ 雨は
降るとふ その雪の 時じきが如く その雨の 間なきが如く くまも
おちず 思ひつづぞ来る その山道を

右の歌は、詞句に相違があるので、重ねて載せておく。

天皇が吉野の宮に行幸された時作られた歌

27 よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よき人よ君
(昔のよい人が、よい処とよくよく見てよいと言つた吉野を、よく
よく見給えよ。よき人たる人よ。)

藤原宮で天下を治められた天皇の御代

天皇(持統)の作られた歌

28 春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山
(春が過ぎ、夏が来たと見える。白い布の衣が干してある。天の香具
山に。)

近江の荒廃した都を通つた時、柿本朝臣人麿の作つた歌

29 玉だすき 敵火の山の 檀原の 聖のみ代ゆ(或は、宮ゆ)生れま
しし 神のごとごと つがの木の いやつぎつぎに 天の下 知ら
しめししを(或は、めしける)空にみつ 大和をおきて 青によし
奈良山を越え(或は、空みつ大和をおき青によし奈良山越えて)い
かさまに 思ほしめせか(或は、思ほしめか)天離る ひなには
あれど 岩ばしの 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知
らしめしけむ 天皇の 神のみことの 大宮は こと聞けども
大殿は こと言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立つ 春日の

霧れる(或は、霞立つ春日が霧れる夏草が茂くなりぬる)もしきの
大宮処 見れば悲しも(或は、見ればさぶしも)

(タマダスキ敵火の山の檀原の天皇の御代から、世に出た天皇のこ
とごとくが、ツガノキノ次から次に天下を治められたのを、ソラニ
ミツ大和を後にして、アラニヨシ奈良山を越えて、どんな風に思召
されてか、アマザカル田舎ではあるけれど、イハバシノ近江の国の
ササナミノ大津の宮に天下を治められたであろう天皇の大きな宮
は、こと聞くけれど、大きな殿はこと言うけれど、春草の茂つ
ている、カスミタツ春の日の霞んでいるモモシキノ大宮処を見れば
悲しいことである。)

反歌

30 ささなみの滋賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ
(ササナミノ滋賀の唐崎は変ることなくあるけれど、大宮人の船は待
つても来ることはない。)

31 ささなみの滋賀の(或は、比良の)大わだよどむとも昔の人にまた
も会はめやも(或は会はむと思へや)
(ササナミノ滋賀の大海は流れずに居ろうとも、昔の人にまた会うこ
とはできない。)

高市古人が近江の旧都を悲しんで作つた歌(ある本には、高市黒人であ
るといふ)

32 古の人に我あれやささなみの古き都を見れば悲しき
(古い大津の宮の世の人でも私はあるのであろうか。ささなみの
古い都を見れば悲しい。)

33 ささなみの国つみ神のうらさびて荒れたる都見れば悲しも
(近江のささなみの国の神様の心が寂しくなつて、荒れた都を見れば

悲しい。

紀伊の国に行幸された時、川島皇子の作られた歌〔或は、山上臣憶良の作という〕

34 白波の浜松が枝の手向草幾代までにか年の経ぬらむ〔或は、年は経にけむ〕

〔白波の寄せてくる浜の松の枝に掛けてある手向けの品々、どのくらい年を重ねたのであろう。〕

背の山を越えられた時に、阿閉皇女の作られた歌

35 これやこの大和にしては我が恋ふる紀路にありとふ名に負ふ背の山〔これがまあ、大和の国に居って私が恋しく思う、紀伊にあるという、背という名を持った山であるよ。〕

吉野の宮に行幸された時に、柿本朝臣人麿の作った歌

36 やすみしし 我が大君の聞しをす 天の下に 国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と み心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの 大宮人は 船並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らず みなぎらふ 滝の宮処は 見れど飽かぬかも

〔ヤスミシシわが天皇の治められる天下に、国は多くあるけれど、山や川の清い川沿の地であって、ミココロ吉野の国のハナチラフ秋津の野辺に、宮の柱を太く立てておいでになれば、モモシキノ大宮人は船を並べて朝の川を渡り、船をきそって夕べの川を渡る。この川のように絶えることなく、この山のようにいよいよ高く世を治められる、激流となつて流れる急流のほとりの宮処は、見ても見ても面白い。〕

反歌

37 見れど飽かぬ吉野の川の常なめの絶ゆることなくまた帰り見む〔見ても飽くことのない吉野の川の常に滑らかな巖のように、絶えることなく、また来て見よう。〕

38 やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 たぎつ河内に 高殿を 高しりまして 登り立ち 国見をせば たたな

はる 青垣山 山つみの 奉る御調と 春べは 花かざし持ち 秋立てば 紅葉かざせり〔或は、もみぢ葉かざし〕夕川の 神も大御食に 仕へまつると 上つ瀬に 鵜川を立て 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も 寄りてまつれる 神のみ代かも

〔ヤスミシシわが天皇が、神として神々しく振舞われると、吉野川の急流の川沿いに、高殿を高く立てられ、登り立ち国見をなされれば、重り合う青垣の如き山は、山の神が天皇に献るみつぎ物として、春は花を頭に飾り、秋になれば紅葉を飾った。夕べの川の神も、天皇のお膳に奉仕すると、上流の瀬には鵜川を立て、下流の瀬にはさで網をさし渡す。山も川も天皇にお仕え申す神の御代であるよ。〕

反歌

39 山川も寄りてまつれる神ながらたぎつ河内に船出せすかも〔山も川も帰服し奉仕する神様として、急流の川のほとりに船を乗り出されることかな。〕

伊勢の国に行幸された時、都に残っていて、柿本朝臣人麿の作った歌

40 阿胡の浦に船乗すらむ処女等が玉裳の裾に潮満つらむか〔阿胡の浦に船乗りをするであらう処女たちの美しい裳裾に、潮が満ちてくるであらうか。〕

41 くしろつく答志の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ
(タシロツク答志の崎に、今日、大宮人たちが玉藻を刈るであらうか。)

42 潮騒に伊良湖の島辺こぐ舟に妹乗るらむか荒き島みを
(潮の騒ぐ中に、伊良湖の島のほとりをこぐ舟に、妹は乗るであらうか。荒い島のほとりを。)

当麻真人磨の妻が作った歌

43 我が背子は何処行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ
(わが夫はどこを行くであらう。オキツモノ名張の山を今日越えるであらうか。)

石上大臣が行幸に従って作った歌

44 我妹子をいざ見の山を高みかも大和の見えぬ国遠みかも
(ワギモコヲいざ見の山が高いためであらうか、大和の国が見えない。国が遠いためであらうか。)

右の歌は、『日本書紀』に「朱鳥六年壬辰の年の春三月三日に、
浄広肆広瀬王等を行幸の留守居役に任命した。中納言三輪朝臣高
市磨が、自分の官位を投げ出して、農繁期をさし控えての行幸は
なさるべきでない」と、重ねてお諫め申し上げたが、天皇は諫めに
従われずに、六日について伊勢に行幸された」とある。

輕皇子が阿騎野に宿られた時、柿本朝臣人磨の作った歌

45 やすみしし 我が大君 高照らす 日のみ子 神ながら 神さびせ
すと 太敷かす 都をおきて 隠口の 初瀬の山は ま木立つ 荒
山道を 岩が根の さへき押しなべ 坂島の 朝越えまして 玉か
ぎる 夕さり来れば み雪降る 阿騎の大野に 旗すすき 小竹を

押しなべ 草枕 旅宿りせず 古思ひて

(ヤスミシシわが大君、タカテラス皇子は、神として神らしく振舞われると、立派な都をあとにして、コモリクノ初瀬の山では、木の立っている荒い山道を、岩の上の藪を押しなびかせ、サカトリノ朝越えて行かれて、タマカギルタ方になれば、ミユキフル阿騎の野原に、ススキやシノを押し伏せ、クサマクラ旅宿りをなさる。昔を思つて。)

短歌

46 阿騎の野に宿る旅人打ちなびきいも寝らめやも古思ふに
(阿騎の野に宿る旅人は、のびのびと寝ることも寝られまい。昔を思

うので。)

47 ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君が形見とぞ来し
(草を刈る荒野ではあるけれど、紅葉の葉の如く過ぎ去り、なくなつた父君の日並皇子の形見と思つて来た。)

48 東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ
(東の方の野に、朝炊の煙の立つのが見えて、後を見れば月が西に傾いている。)

49 日並知の皇子のみことの馬並めてみ狩立たしし時は来向ふ
(日並の皇子が馬を並らべて狩に立たれた季節が来ようとしてい

藤原宮の造営に奉仕した民の歌

50 やすみしし 我が大君 高照らす 日のみ子 荒たへの 藤原が上
に をす国を めし給はむと 御殿は 高知らさむと 神ながら
思はずなべに 天地も 寄りてあれこそ 岩ばしの 近江の国の
衣手の 田上山の ま木さく 櫓のつまでを もののふの 八十宇

治川に 玉藻なす 浮かべ流せれ そを取ると 騒ぐみ民も 家忘れ 身もたな知らに 鴨じもの 水に浮きゐて 我が作る 日のみ門に 知らぬ国 寄り巨勢道より 我が国は 常世にならむ 文負へる くすしき亀も 新代と 泉の川に 持ち越せる ま木のつまで 百足らず いかに作り 上すらむ いそはく見れば 神ながらし

(ヤスミシシわが天皇、タカテラス日の御子が、アラタヘノ藤原の地に、領土を治められようと、宮殿を高く立てられようと、神として思われるのとともに、天の神地の神も、それに従っているから、イハバシノ近江の国のコロモデノ田上山の、マキサク檜の材木を、モノフノヤソ宇治川に、藻草の如くに浮かべて流せば、それを取ると、騒ぐ人民らも、家のことも忘れ自分のこともかまわず、鴨の如くに水に浮かんでいて、我々の作る天皇の御殿に、まだ治めてない国が従って来るという巨勢路から、わが国は永久に栄える国になろうという、しるしをつけた不思議な亀も、新しい時代になるというので、出て来る泉川に、持ち運んだ木の材木を、モモトラズ筏に作って、こぎのぼろうと勤めるのを見れば、神のすることさながらのように見える。)

右の歌は、『日本書紀』に「朱鳥七年 癸巳の年の秋八月、藤原の宮どころに行幸された。八年甲午の年の春正月、藤原の宮に行幸された。冬十二月六日、藤原の宮に遷都された」とある。

明日香の宮から藤原の宮に遷都の後、志貴皇子の作られた歌

51 采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く
(采女の袖を吹き返す明日香の風が、都が遠くなったので、空しく吹いている。)

藤原の宮の御井の歌

52 やすみしし 我が大君 高照らす 日のみ子 荒たへの 藤井が原

に 大御門 始め給ひて 壇安の 堤の上に あり立たし めし給へば 大和の 青香具山は 日の縦の 大御門に 春山と しみさび立てり、敵火の このみつ山は 日の横の 大御門に みづ山と山さびいます 耳岳の 青すが山は そともの 大御門に よろしなべ 神さび立てり 名くはし 吉野の山は かげともの 大御門ゆ 雲居にぞ 遠くありける 高知るや 天のみ陰 天知るや 日のみ影の 水こそは 常にあらめ 御井の真清水

(ヤスミシシわが天皇、タカテラス日の御子が、アラタヘノ藤原が原に、大きな宮殿を作り始められて、壇安の堤の上に立つて御覧になれば、大和の青香具山は東のほうの大きな御門の所に、春の山らしく茂って立っている。敵火の美しい山は、西の御門にみずみずしい山として山らしくある。耳成山の青い草山は、北の御門にふさわしく神々しく立っている。ナグハシ吉野の山は、南の御門から雲のいるあたりに、遠くある。高く天にそびえる大宮、天に高く立つ大宮、その大宮の水は常に変らずあるであらう、藤原の宮の御井の水は。)

短歌

53 藤原の大宮仕へあれつくや処女がともはしき呼ばふかも

(藤原の大宮の宮仕へに、「あれ」の柳を立てるのであろうか、処女たちはしきりに呼びかわすよ。)

右の歌は、作者がわからない。

大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇(持統)が紀伊の国に行幸された時の歌

54 古瀬山のつらつら椿つらつらに見つつ思ふな古瀬の春野を
(古瀬山の連なっておる椿を、つくづくと思ふな古瀬の春の野を。)

右の一首は、坂門人足。

55 あさもよし紀人^{きひと}乏しも真土山^{まつちやま}行き来と見らむ紀人^{きひと}乏しも

(アサモヨシ紀伊の人は生まれまれである。真土山^{まつちやま}を行きに帰りに会う紀伊の人は生まれまれであるよ。)

右の一首は、調首淡海。

ある本の歌

56 川上^{かはかみ}のつらつら椿^{つばき}つらつらに見れども飽かず古瀬^{ふるせ}の春野^{はるの}は

(川^{かは}のほとりの連なっておる椿^{つばき}、その如くつくづくと見ても見飽かないよ。古瀬^{ふるせ}の春^{はる}の野^のは。)

右の一首は、春日蔵首老。

二年壬寅、太上天皇(持統)の参河の国行幸の時の歌

57 引馬野^{ひくまの}にはほ榛原^{はさはら}入り乱り衣^{ころも}にははせ旅^{りょ}のしるしに

(引馬野^{ひくまの}に色美しい榛^{はさ}の木^きの原^{はら}に乱れはいつて、着物^{きもの}をその色にうつらせなさいよ、旅^{りょ}の記念に。)

右の一首は、長忌寸奥麿。

58 何処^{いづく}にか船泊^{ふねどまり}すらむ安礼^{あんれ}の崎^{さき}こぎたみ行きし棚^{たな}無し小舟^{せうぶね}

(どこに船^{ふね}どまりするのであらう。安礼^{あんれ}の崎^{さき}をこぎ巡^{めぐ}って行^いった棚^{たな}無し小舟^{せうぶね}は。)

右の一首は、高市連黒人。

誉謝女王^{よせきみ}の歌

59 ながらふるつま吹く風の寒き夜に我が背^せの君^{きみ}はひとりか寝らむ

(長くなびいておる衣^きのつまを吹く風の寒い晩に、わが夫^{おとこ}の君^{きみ}はひとり寝ることであらうか。)

長皇子^{ちみぎみ}の歌

60 宵^{よる}に会ひて朝面^{あそま}無名張^{なばり}にか日長^{ひなが}き妹^{いも}が庵^{いほ}せりけむ

(宵^{よる}に会^あつて朝^{あさ}ははにかみ隠^{かく}るという、名張^{なばり}に、別れて日数^{ひかず}の長い妹^{いも}が宿^{やど}ったことであらうか。)

舍人娘^{とねりのせまめ}が行幸に従つて作つた歌

61 ますらをがさつ矢手^{やた}ばさみ立ち向かひ射^いる形的^{ぎようけい}は見るにさやけし
(ますらをが矢^やを手^てに持^もつて立ち向^{むか}ひ射^いる形的^{ぎようけい}という、形的^{ぎようけい}の浦^{うら}は見るに景色^{けしき}がよい。)

三野連岡麿^{みのむらたけ}が唐に行く時、春日蔵^{かすみがらみ}人老^{ひとやう}の作つた歌

62 ありねよし対馬^{つしま}の渡海^{わたるうみ}中に幣^{ぬさ}取り向けて早^{はや}帰り来ね
(アリネヨシ対馬^{つしま}の航路^{かうろ}の海上^{かいじやう}に、神^{かみ}への幣^{ぬさ}を手^て向けて早く帰^{かへ}り来^こ給^{たま}え。)

山上臣^{やまのうへ}憶良^{おくら}が唐におつた時、故国^{こくに}を思^{おも}つて作つた歌

63 いざ子ども早く日本^{やまと}へ大伴^{おほとも}の御津^{みづ}の浜松^{はまつ}待ち恋^{こひ}ぬらむ
(さあ、諸君^{しよきみ}、早く日本^{やまと}へ帰^{かへ}らう。大伴^{おほとも}の御津^{みづ}の浜^はの松^{まつ}の木^きも待ちこがれておるだらう。)

慶雲三年丙午に難波^{なにわ}の宮^{みや}に行幸^{ぎやう}された時、志貴皇子^{しきみぎみ}の作られ

た歌

64 葦^{あし}辺^へ行く鴨^{かも}の羽^うがひに霜^{しも}降りて寒^{ふせ}き夕^{ゆふ}べは大和^{やまと}し思^{おも}ほゆ
(葦^{あし}の生^なえた岸^きを行^いく鴨^{かも}の羽^う根^ねの上に霜^{しも}が降^ふつて寒^{ふせ}い夜^よは、大和^{やまと}が思^{おも}われる。)

長皇子^{ちみぎみ}の歌

65 霰^{あられ}打^{うち}つあられ松原^{まつはら}住^すの江^えの弟^{おと}日娘^{ひをめ}と見れど飽^あかぬかも
(アラレウツあられの松原^{まつはら}を住^す吉^{きち}の弟^{おと}日^ひという名^なのおとめと一緒に

見るけれども、見飽^あかず面白^{おもしろ}い。)

太上(持統)天皇が難波の宮に行幸された時の歌

66 大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家ししぬばゆ
(大伴の高師の浜の松の根を枕として寝るけれども、故郷の家が思われる。)

右の一首は、置始東人。

67 旅にして物恋ふる鳴の鳴くことも聞えざりせば恋ひて死なまし
(旅にあつて、物を恋しがる鳴の鳴くことも聞えなかつたならば、自分が恋ひ思つて死ぬかもしれない。)

右の一首は、高安大鳥。

68 大伴の御津の浜なる忘れ貝家なる妹を忘れて思へや
(大伴の御津の浜にある忘れ貝のように、家にいる妹を忘れはしない。)

右の一首は、身入部王。

69 草枕旅行く君と知らませば岸のはにふにははさましを
(クサマクラ旅行を行く君と分つたならば、岸の黄色い土で着物を染めてあげようものを。)

右の一首は、清江娘子が長皇子に献つた歌(姓氏はわからない)。

太上(持統)天皇が吉野の宮に行幸された時、高市連黒人の作つた歌

70 大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる
(大和におれば、そこに鳴いてくるのであろうが、呼子鳥が象の中山を鳴きながら越えるよ。)

大行(文武)天皇が難波の宮に行幸された時の歌

71 大和恋ひ寝の寝えぬに心なくこの洲の崎に鶴鳴くべしや
(大和を恋ひ寝つかれないのに同情もせず、この海岸のみ崎に、鶴が鳴くべきではない。)

右の一首は、忍坂部乙鷹。

72 玉藻刈る沖へはこがじしきたへの枕のあたり忘れかねつも
(海藻を刈る沖の方へは舟をこぐまい。シキタヘノ昨夜宿つた枕の

あたりのことが忘れかねる。)

右の一首は、式部卿藤原宇合。

73 我妹子を早見浜風大和なる我を松椿吹かざるなゆめ
(我妹子を早く見るといふ早見の浜風よ、大和にある私を待つてい

る松や椿の木をも、きつと吹けよ。)

大行(文武)天皇が吉野の宮に行幸された時の歌

74 み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む
(吉野の山の山から吹き下してくる風の寒いのに、またまあ今夜も

私はひとり寝ることだろうか。)

右の一首は、作者がわからないが、あるいは天皇の御歌という。

75 宇治間山朝風寒し旅にして衣借すべき妹もあらなくに
(宇治間山は朝風が寒い。旅にあつて着物を貸してくれる妹もおら

ないのに。)

右の一首は、長屋王。

和銅元年 戊申、天皇の作られた歌。

76 ますらをの轡の音すなりものふの大臣楯立つらしも
(ますらおが弓を引く轡の音がする。物部の大臣が楯を立てると見

えらう。)

える。)

御名部皇女が唱和申した歌

77 我が大君物な思はし皇神の継ぎてたまへる我無けなくに

(わが天皇は物を思いなさいますなよ。天照大御神が世継として下さった私ではありませんから。)

和銅三年庚戌の春二月、藤原の宮から奈良の宮に遷都された時に、御乗物を長屋の原に留め、古里を遠望されて作られた歌〔ある本に、太上(元明)天皇の御歌とある〕

78 飛ぶ鳥の明日香の里をおきて去なば君があたりは見えずかもあらむ

〔或は、君があたりを見ずてかもあらむ〕
(トブトリノ明日香の都を後に置いて去ったならば、君の家の辺りは見えないことであろうか。)

ある本にある、藤原の宮から奈良の宮に遷都された時の歌

79 天皇の命かしこみにぎびにし家をおきこもりくの初瀬の川に船浮けて我が行く川の川くまの八十くまおちず万た

びかへりみしつ玉ぼこの道行き暮らし青によし奈良の都の佐保川にいきき至りて我が寝たる衣の上ゆ朝月夜さやかに見ればたへのほに夜の霜降り岩床と川の水凝り寒き夜を顰ふことなく通ひつづ作れる家に千代までに来ませよ君よ我も通はむ

(天皇の命令をつつし、なれ親しんだ家を後に残し、コモリクの初瀬の川に舟を浮かべてわがこいで行く川の、川の曲り目ごとに、幾度も幾度も後を振りかえりながら、タマボコノ道を行き日が暮れ、アラニヨシ奈良の都の佐保川に到着して、私の寝た着物の上から、朝の月かげにはつきり見ると、綿のごとくに夜の霜が降り、岩の床のように川の氷が固まっている、寒い夜を休むことなく、通い通っ

て作った家に、後々までも来なさいよ、君よ、私も通いましょう。)

反歌

80 青によし奈良の家には万代に我も通はむ忘ると思ふな

(アラニヨシ奈良の家には万年も私も通おう。忘れると思うなよ。)
右の歌は、作者がよくわからない。

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の斎宮に遣わした時に、山辺の御井で作った歌

81 山辺のみ井を見がてり神風の伊勢処女ども相見つるかも

(山辺のみ井を見る序ながら、カムカゼノ伊勢処女たちに会ったことであるよ。)

82 うらさぶる心さまねし久方の天の時雨の流らふ見れば

(心寂しく思う思いがしきりであるよ。ヒサカタノ天の時雨の雨の降るのを見れば。)

83 海の底沖つ白波立田山いつか越えなむ妹があたり見む

(海の遠く沖の白波が立つという、その立田山をいつ越えることであらう、そして妹の家のあたりを見ることであろう。)

右の二首は、今考えると、御井で作った歌のように見えない。あるいは、当時吟誦した古歌であろうか。

奈良の宮

長皇子と志貴皇子とが、佐紀の宮で共に宴を催された歌

84 秋さらば今も見ゆる如妻恋に鹿鳴かむ山ぞ高野原の上

(秋になれば、今見るように妻を恋しがって、鹿の鳴く山であるぞ。この高野原のあたりは。)

右の一首は、長皇子。